

名作再読、拾い読み (31)

『悲しき酒場の唄』 (1) (*The ballad of the sad cafe*)

小澤文彦

カーソン・マッカラーズ (Carson McCullers, 1917-1967) は、アメリカ南部ジョージア州コロンバスで生まれました。幼い頃からピアノの練習に励み、17才の時にジュリアード音楽院を目指してニューヨークへ行きます。しかし、学費を盗まれて進学を断念し、自活しながらコロンビア大学やニューヨーク大学で創作の勉強を続けました。1936年に自伝的な作品の『神童』がストーリー紙に掲載され、その翌年、作家志望のリーヴズ・マッカラーズと結婚して創作に専念し、『心は孤独な狩人』(1940)を書き上げます。しかし、この頃からリーヴズと性格が合わなくなり、1940年の暮れには離婚しました。『金色の眼に映った影』(1941)を発表した時には、ニューヨークへ戻って芸術家集団「フェブラリー・ハウス」のメンバーになっていましたが、刺激の強すぎる生活のためリユーマチ熱による心臓発作に襲われ、コロンバスに戻ります。そして、戦場から負傷して帰還したリーヴズと再会し、同情心からとも言われていますが彼と再婚しました。1946年に発表した『結婚式のメンバー』はブロードウェイで劇化・上演されて501回のロングランとなります。『悲しき酒場の唄』(1951)は他の作品と併せて短編集として発表されましたが、これも好評を博しました。リーヴズは作家になる夢を諦めて酒浸りになり、その後、麻薬に溺れてマッカラーズに心を迫るようになり、彼女は怖くなって彼の許を去り、リーヴズは1953年にパリのホテルで自殺します。最後の作品である『針のない時計』(1961)を発表した頃、彼女は既に半身不随となっていて、原稿のタイプ打ちが困難な状態でした。彼女は、1967年に脳溢血のためニューヨークで亡くなります。50歳でした。

今回は、『悲しき酒場の唄』を紹介します。静かな田舎町で酒場を経営する男勝りの大女ミス・アメリカと彼女を巡る二人の男性との三つ巴の争いが描かれています。

身長6フィート2インチ(≒188cm)、体重160ポンド(≒72.6kg)近いミス・アメリカは肥料や小麦粉や嗅ぎタバコといった日用品を扱う店を経営し、自宅裏の醸造所ではウイスキーを製造していました。色黒で男のように筋骨たくましく、少し斜視でしたが美人でした。金儲けが上手で、モロコシのシロップやソーセージを作って売っ

たり大工仕事も器用にこなしたりするのですが、唯一の弱点は法廷での裁判沙汰が大好きということです。それと過去に10日間だけの結婚生活を送ったということを除けば、30歳の春まで単調な生活を送っていました。

4月のある晩、真夜中近い頃、近くの紡績工場が夜間操業を続けている中、ミス・アメリカの店には明かりがついていて、表のベランダには5人の男がたむろしていました。そこへ身長が4フィート(≒122cm)そこそこで背中が曲がったみすばらしい身なりの男が現れます。古ぼけた写真を見せて自分はミス・アメリカの従兄弟だと言いますが、彼女は無言で男を見下ろしていたので、彼は声を上げて泣き始めました。皆はミス・アメリカが彼を叩き出すと思いついていたのですが、意外にも彼女は彼に優しい言葉を掛けて酒を飲ませ、名前を尋ねます。ライマンと答えた彼に食事を与えて二階の部屋に連れて行きましたが、このようなことは滅多にないことだったので皆は驚くばかりでした。次の日、彼の姿が見えないので、彼が殺されて沼地に埋められたという噂が立ちました。しかし、翌々日の夜8時過ぎに、ミス・アメリカの店の表のベランダに好奇心一杯の男達数人が集まった時、彼等が眼にしたのは清潔感溢れる姿に変身したライマンでした。部屋中が水を打ったように静まり返った中、おろしたての赤と黒のチェックのシャツ、半ズボンに長靴下といった服装の彼は、きれいに磨かれた靴を履き、首にはライム・グリーンショールの巻き付け、偉そうな態度で階段をゆっくり降りて来たのです。彼が皆の質問に答え、世間話が始まって次第に雰囲気は和やかになり、他の人々も仲間に入って賑やかになった頃、ミス・アメリカが姿を現し、店内やベランダで酒を飲むことを許します。それが酒場の始まりとなりました。

〈次号へ続く〉

参考文献

1. Carson McCullers "The ballad of the sad cafe : and other stories" (Mariner Books, 2005)
2. カーソン・マッカラーズ著 西田実訳
『悲しき酒場の唄』(白水社、1990)

おざわ ふみひこ (情報サービス課)